

漢字はホントは面白い VII

昔の人も間違えた!?

杉本 浩

まずは「秘」という字を採り上げます。「ヒミツ」「マルヒ」の秘です。これは小学 6 年生で習う漢字で、もちろん皆さんもよくご存知の字でしょう。でもよく考えてください。なぜこの字が「のぎへん」なのか。

のぎへん(禾)は、もともと、稲をはじめとする穀物が稔って穂を垂れている姿を描いた象形文字です。だから、稲・種・穂・穀などの穀物に関する字や、秀(ひいでた穂)・積(収穫した作物を保管する)・科(穀物を升で量る)・税などの字に使われます。では、「秘」と穀物にはどんな関係があるのでしょうか・・・実は関係はないのです!

祕

康熙字典

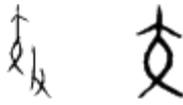
「秘」の旧字体は「祕」です。似ていると言えれば似ているかもしれませんが、禾と示は全く別の部首です。示は神に供える祭壇を象ったものといわれ、神・社・祈・祀など、神様関係の字に使われます(新字体では「ネ」の形になっているので違和感があるかもしれませんが、元は示の形です)。「祕」の字も、元は神前で行う秘密の儀式のことだったとされ、旧字体は字の意味を反映した字だったと言えるでしょう。

ではなぜ、のぎへんの字が使われるようになったのか。これには深い意味があった、というわけではなく、単純に写し間違えた、というのが有力な説です。

日本では戦後まもなく(1949年)当用漢字字体表が定められ、このとき「秘」の字がオーソライズされたのですが、この時に日本の関係者が間違えた…とも言い切れません。のぎへんの「秘」は、示へんの字とともに、中国でも古くから使われていました。古い写本や石碑に使われている字を集めた「大書源」(二玄社)という本で調べると、王羲之(4世紀)や顔師古(6~7世紀)といった有名な書家や、日本の空海(8~9世紀)も、のぎへんの秘を使っています。ただ、中国の古い字書に「俗に秘に作るのは間違い」と書かれており、清代に勅命により編纂された「康熙字典」も「祕」を正字として扱っています。このため日本でも戦前の活字は「祕」の字体のものが多かったです。

当用漢字字体表では、「秘」は示へんの部分に記載され、小さい字で「祕」の字体も添えてあり、まえがきによると「活字として従来二種以上の形のあった中から一を採ったもの」という扱いになっていたようです。このとき「のぎへん」の形を選んだことが、日本側の間違いだと考える人もいるでしょう(私もその一人です)。

ちなみに、のぎへんの「秘」は、もともとベツという発音で、香草の名だったという文献もあります。つまり、形も音も意味も違う、別の字だった秘が、いつしか間違われて「祕」を使うべき部分にも使われてしまい、それがあまりに広まったので、日本の当用漢字にも採用された、ということのようです。



「効」甲骨文 「交」金文

いま、「秘」という字について説明しましたが、こんな例は沢山あります。もう一つ挙げると、「効」という字。この字は、甲骨文を見れば分かる通り、左は「矢」、右は棒のようなもので左のものを殴る意味の「攴」で、本来は、矢を叩いてゆがみを正すことを示す会意文字だったと言われてい

ます。

「交」は次の時代の金文しか伝わっていませんが、甲骨文の「効」の矢の部分に形が似ています。それに加え、字全体の発音と交の発音が近いこともあり、交が声符（発音を表す部分）である形声文字だと思込まれたようです。「説文解字」（最古の字書、西暦 100 年）もこの解釈です。

そうすると、攴が意符（意味を示す部分）ということになりますが、「殴る」だけでは意味をなさないで、俗字の「効」が使われるようになりました。これは「力」を意符とし、「効く」意味ではもっともらしい字体で、魏の時代（3世紀）から既に使われています。それでも康熙字典には「効」の字体で掲載されましたが、その後、当用漢字字体表には、秘と同様に俗字の効が採用されました。結果として、右側も左側も別の形になってしまったという例です。

以前、この連載の「足のつく漢字」（2018 年。ご存知ない方は私の HP からバックナンバーをご覧ください）で、「夂」（はつがしら）は左右の足を間違えて配置した結果、出来上がった字だということを紹介しました。これなどは、甲骨文ではほとんど左右を間違えていないのに、次の時代の金文ではすべてが間違っているというありさまです（詳しくは同 HP「分かったようでわからない古代文字」参照）。

甲骨文は中国古代の殷王朝で使われ（約 3300 年前）、金文は殷王朝を倒した周王朝で盛んになりました。「効」や「夂」の場合は、この間の断絶により、造字の意図が十分には伝わらなかったものと思われます。甲骨文は殷の滅亡とともに忘れられ、再発見されたのは 19 世紀末で、漢代の学者もその存在を知りませんでした。中国ではその後も王朝の交代が相次いだので、漢字の継承には形として残った「文字」を鵜呑みにせざるを得なかったのでしょう。

また、金文以後の時代は、文献は全て人の手で写して流布していきました。その際に、写し間違えて違った字が書かれた場合も多いでしょう。「秘」の場合は、草書で崩された部首の部分を読み違われたものと思われます。

でも、書写する人が文字の成り立ちを理解していれば、間違った字が大手を振って普及することはなかったと思います。漢字については、よく考えて作ったなと感心させられることも多いのですが、作った人の意思はたちまち忘れられ、形だけ似た「にせもの」が横行する場合も多いようです。今さらばやいてもしょうがありませんが、もう少し考えてほしかった！

画像引用元

甲骨文・金文：漢字古今字資料庫（台湾・中央研究院ウェブサイト）

康熙字典（内府本）：清、1716 年 [東京大学東洋文化研究所所蔵] PDF 版 初版

パーソナルメディア 2011 年

*私のホームページもご覧ください！

漢字教育士ひろりの書齋	検索
-------------	----

Google か YAHOO! JAPAN で検索！

この連載のバックナンバーも掲載しています。